

## ミシェル・アンリ読本

川瀬雅也／米虫正巳／村松正隆／伊原木大祐 編  
法政大学出版局

© 2022 KAWASE Masaya, KOMEMUSHI Masami,  
MURAMATSU Masataka, IBARAGI Daisuke *et al.*

## まえがき

フランスの著名な作家、マルセル・ブルースト（一八七二—一九二二）に、「見知らぬ男」という短編がある。毎晩、夕食に多くの客人を招き、決して一人になることのない裕福で魅力的な男ドミニックの話である。ある晩、彼が、いつものように客人たちの到着を待っていると、一つの声が彼に呼びかける——「ドミニック」——。遠くからとも、近くからともいえぬその声にドミニックは怯え、目を上げると、そこに一人の見知らぬ男が立っていた。それはドミニックが招いた客ではなかった。男はドミニックに言う。「君は私に対して犯した誤りを償わなければならない……。それに私は、他の連中なしに過ごすすべを君に教えてあげられる。君が年老いたら、連中はもう来なくなるのだから」。ドミニックは男に答える。「君を夜食に招待しよう」。しかし、見知らぬ男は言う。「私を君のそばに残したければ、他の客たちは断らなければならない」。その時、招いた客たちがドアをノックする音が聞こえる。「あの人たちを断ることはできない。私は一人ではいられない」。ドミニックがそう答えると、男は言う。「事実、私といたのでは君は一人になってしまう。それでも私をそばに残すべきなのだ……。私は彼ら全部よりもっと君を愛している」。そして男はドミニックに、自分を選ぶか、客人たちを選ぶか決めるように促す。ドミニックは、ドアを開けに行き、振り返らずに男にたずねる。「いったい君は誰なの？」すでに姿を消しかけていた男はドミニックに答える。「今夜もやはり君は、習慣のために私を犠牲にした……。まもなく君は私を殺してしまうだろう。二度と会うこともなくなる……。私は君の中にいた、しかし永遠に君から遠ざかる。すでに私はほとんど無に等しい。私は君の魂なのだ。君自身なのだ」——消えた訪問者と交わした対話を客人たちに話して聞かせようとしたドミニックが、うまく話せずにいると、客の

一人が彼を遮り、次のように結論づけた。「絶対に一人ではいけない。孤独は憂愁を生み出す」。皆は満足し、再び飲み始める。ドミニックも陽気に話しはじめた。

なんだか不思議な話だが、ここに出てくる「見知らぬ男」は、この男の言う通り、ドミニック自身なのだろう。ドミニックは、外からやってくる客人たちにたえず囲まれ、決して一人でいることはない。彼の注意はいつも外に向いている。しかし、彼の内には同時に、一人になって、みずからの内面性を見つめ、自分自身のもとに留まりたいという欲求もある。そうした欲求がある形をとって彼の前に現れたのが、この「見知らぬ男」だったのである。だが、客人たちに囲まれた生活にすっかり慣れきった彼は、そうした欲求に身を委ねることができない。彼は、客人たちを断って、男を、つまり、自分自身を自分のそばに残すことが、自己との内密性のうちに生きることができないのだ。結局、ドミニックは、自己自身から、自己の生から目を背け、外部からやってきた客人たちに心の扉を開ける。彼は、外なる他者とのおしゃべりのなかで、内なる自己を遠ざけ、自己を忘れ、自己を無にし、そして、ついに自己を殺すのである。この短編でプルーストが「客人」として描いたのは、決して単なる「他者」ではなく、自己にとつての「外部」、「外在性」そのものだと言えるだろう。プルーストは、外部や外在性との関わりの中で、自己を、自己の内的生を見失い、忘却し、それを抹消してしまいう人間の姿を描こうとしたように思われる。そこには、人間の本質、自己の本質が内的生のうちにあるにもかかわらず、現代の人間において、その内的生が見失われていることに対するプルーストの憂いを感じられる。

ところで、この短編の作者プルーストがこの世を去ったその年（一九三三年）、哲学者であり、作家であるミシェル・アンリがこの世に生を享けた。もちろん、アンリがプルーストの没した年に生まれたことは単なる偶然でしかない。しかし、アンリの思想のうちには、「ドミニック」に象徴される人間の姿のうちに人間性の危機を認め、そこからの救済を探ろうとする姿勢が認められる。ただし、哲学者であるアンリは、そうした人間性の危機が、現代の人間の姿のうちに認められるだけでなく、古代ギリシア以来の西洋思想の伝統に由来するものを鋭く見抜いた。アンリによれば、古代ギリシア以来、西洋思想は、事柄の真理や本質を、目に見えて明らかなく、隈なく光に照らされていること、目の前に、外部に隠れなく展開されていることのうちに認めてきた。だが、そうした伝統のなかで、目の前に、外部に展開され、光に照らされることのないもの、目に見えないもの、つまり、人間の自己や内的生のあり方が見失われ、忘却され、そして、抹殺されてきたとするのである。アンリは、彼が残した哲学的著作のなかで、こうした生の忘却としての西洋思想の歴史的展開を詳細に分析する一方で、人間の社会、文化、芸術が、その本質を見えない内的生のうちにもつにもかかわらず、外在性のうちで見えるものとして表象化され、野蠻へと姿を変えてしまっている現状を告発している。また、小説においては、まさにプルーストがその短編で行ったように、内的生と外在性の諸関係をめぐるみずからの思想を、寓意的、あるいは具体的な物語の展開のうちに折り込み、合理的、論理的な推論を展開する哲学書とは別の形で、自由にのびのびと想像と創意の翼を広げているのである。

アンリが、こうした彼独自の思想を胸に抱き始めたのは、彼がまだ二〇代半ばの頃であつたろうと思われる。彼は、かなり早い時期から、人間の内面性、内的生、感情、自己といったものに眼を向けるとともに、従来の哲学がそうした次元を拾い上げてこなかったことに気づいていた。このように、若いうちから自らの哲学の確固とした基本的枠組みを手に入れていたアンリにとつて、なすべきことは、この枠組みに具体的な肉付けを施していくことだったにちがいない。そのために、アンリは、伝統的な哲学が人間の内面性を覆い隠してきた経緯やその理由を解き明かすと同時に、彼が根源的な真理の在り処と考える内的生の構造を解明することに没頭した。彼は、みずからのラディカルな二元論的思想をひたすら彫琢すると同時に、そうした思想の枠組みを社会、文化、芸術、キリスト教などの諸領域へと応用していくことに専心したのである。

おそらくは、自らに課したそうした責務に邁進するために、アンリは、パリの喧騒を離れ、南フランスの地、モンペリエにとどまり、ひたすら哲学史と対峙し、社会情勢や文化の現状を冷静に見極め、文学作品の創作をおして、自由に想像の翼をはたかせたのだろう。そうした彼の態度は、当然、当時の「哲学的な流行」からも一定の距離を

保ち続けるものだったろうし、また、ラディカルな二元論の立場を貫く彼の思想は、いわば「独自路線」を行くものだったろうと思われる。そんなことから、アンリは「孤高 (haute solitude)」の哲学者とさえ呼ばれた。<sup>2)</sup> フランスにおいても、アンリの思想が、同時代のサルトル、メルローポントイ、レヴィナス、リクール、ドゥルーズなどの思想に比べると、必ずしも多くの話題を集めてこなかったのも、こうしたことが影響しているように思われる。

そうした状況は日本においても同じであって、やはり、アンリ哲学が話題にのぼる機会には、他の同時代の哲学者たち比べて多くはない。それは、フランスにおける場合と同様、彼の哲学者としての態度とラディカルな哲学的姿勢が人を寄せ付けない「孤高さ」をもつからであるように思われる。結果として、アンリ哲学は、いまだ十分に掘り下げられていない未開拓の領域を残していることになるわけで、そうしたアンリ哲学をめぐる研究状況はおのずと、諸々の学問領域において、アンリに関する話題を制限させることにもなる。実際、アンリの著作の多くが日本語に翻訳されているにもかかわらず、アンリの哲学の内容やその思想形成を深く掘り下げたり、アンリ哲学を応用的に展開したりする研究は必ずしも多くない。この『ミシェル・アンリ読本』が企てられたのは、そうした日本におけるアンリ研究の状況に少しでも「風穴」を開けるためである。この「風穴」を通して、アンリの思想世界のうちに、一人でも多くの新しい読者が入ってきてくれることを期待したい。

ここで、この『ミシェル・アンリ読本』刊行の経緯についても簡単に説明しておこう。

今回の刊行の背景には一〇年以上にわたる「日本ミシェル・アンリ哲学会」の活動の積み上げがある。そもそも日本におけるミシェル・アンリ研究は、山形頼洋、松永澄夫、今村仁司などによってアンリの哲学が日本に紹介されたことに始まるが、二〇〇九年に「日本ミシェル・アンリ哲学会」が発足すると、アンリ哲学に関心を寄せる研究者たちがこの学会に集うようになった。それ以来、「日本ミシェル・アンリ哲学会」は、日本におけるミシェル・アンリ研究のプラットフォームとして、毎年の研究大会や学会誌『ミシェル・アンリ研究』の発行を通して、日本のアンリ研究を牽引してきたと言える。

学会発足から一二年ほど経った二〇二〇年、アンリの生誕百年となる二〇二二年を二年後に控えた頃、アンリ生誕百年（同時に、アンリの没後二〇年）を記念して、学会としてなんらかの企画を行うことが提案された。さっそく、学会内に、この企画について検討するワーキンググループが立ち上げられ、企画内容をアンリの思想を紹介する書籍の出版とすることが決められて、内容についても検討された。当初予定されていた書籍はどちらかというと専門家向けの内容だったが、その企画案をもって法政大学出版社に相談したところ、反対に、法政大学出版社から、より一般向けの『ミシェル・アンリ読本』として刊行することを勧められ、それに合わせて内容を見直し、本読本の刊行に至った次第である。

先にも述べたように、日本におけるアンリ受容はいまだ広範な展開をみせるにいたっていない。その意味では、まずはアンリの思想を一般向けに紹介し、より多くの方にアンリの思想を知ってもらうことが重要だろう。そうしたことから本読本は、哲学や思想に関心を持つ一般の読者を対象に、アンリの人物像、その思想内容、他の哲学者たちとの関係、さらには、小説家としての側面など、アンリに関して幅広く紹介することをめざした。

本読本は四部に分かれている。第一部「ミシェル・アンリの軌跡」では、まず、アンリの人物像と生涯を紹介し、次いで、初期から晩年にいたるまでの彼の思想の概略を分かりやすく解説した。この第一部は、本読本全体への導入の役割を果たすものであり、特に、アンリの思想にはじめて触れる読者には、まずこの第一部から読み始めることをお勧めする。

第二部「西洋哲学史を読み解くミシェル・アンリ」は、西洋哲学史との対話を通して自らの思想を彫琢したアンリが、ドイツ神秘主義から現象学にいたるまでの西洋哲学史をどう読んだかを紹介するとともに、逆に、西洋哲学史の流れの中からアンリの思想に光を当てるようにも配慮した。

第三部「ミシェル・アンリにおける主要テーマ」では、文字通りテーマ別にアンリの思想を紹介している。読者は、この第三部を読めば、アンリ哲学における主要問題の概略をカバーすることができるだろう。また、この第三部では、

これまでほとんど紹介されてこなかった「小説家としてのアンリ」についても解説している。

第IV部「ミシェル・アンリと現代思想」では、アンリを現代の哲学者たちのうちに位置づけ、現代思想におけるアンリ哲学の特徴、意味、さらには、その限界をも描き出すことを試みた。ここで取り上げた哲学者たちのうちには、アンリとの間に相互の言及がほとんど、あるいは、まったく見られないものも含まれているが、現代思想という一つの地図の上に、そうした彼らを配置したらどんな景色が見えてくるかを執筆者の方々に描き出していた。本読本では、第III部までは、基本アンリの思想の紹介に徹しているが、この第IV部は、むしろ各章の執筆者の独自の観点から独創的な風景を描き出していたくようにお願いした。

本読本は、この他に、アンリの主要著作の解題、コラム、そして、略年表を掲載した。アンリの各著作において何がテーマにされ、何が論じられているかをつかむには主要著作解題が便利だろう。また、コラムでは、アンリと親交の深かった方たちにアンリの思い出を語っていただいた。哲学的な議論の合間のコーヒーブレイクとして気楽に読んでいただければと思う。また、巻末の略年表では、アンリの生涯を、彼が生きた時代の現代思想の状況、および社会、政治、文化の状況とともに示した。彼がどのような時代状況のなかで哲学と文学に打ち込んだのかをあらためて確認するのに役立つだろう。

なお、本読本は多くの執筆者の論考から構成されているが、編者としては、単なる論文集のようなものではなく、統一された一冊の著作となるように最大限の注意を払った。アンリの専門用語は可能なかぎり統一し、論考中の諸々の表記の仕方についても調和させるように配慮した。さらには、読者の便宜のために、各章のあいだに多くのクロスリファレンスを入れている。読者は、単に各章を順に追っていくだけでなく、クロスリファレンスを手がかりに、各章のあいだを自由に往来することで、アンリの思想世界を立体的に体験することができるだろう。

先にも述べたように、本読本が刊行に至ったのは多くの方々のご尽力のおかげである。これまで日本ミシェル・アンリ哲学会の活動を支えてくださった会員のみなさん、学会活動にご協力いただいた会員以外の研究者のみなさん、そして、今回、本読本のために、時間を割いて論考執筆の労を取っていただいた執筆者のみなさんに、この場を借りてお礼を申し上げる。特に、執筆者のみなさんには、度重なる編者からの原稿修正依頼に対して、そのつど丁寧にご対応いただいた。

また、本読本は表紙および本文内にアンリの写真を掲載しているが、これらの写真はすべて故山形頼洋教授夫人の山形恭子氏、および本読本コラム①執筆者のロラン・ヴァンシャルド氏から提供していただいたものである。お二人のご厚意とご協力に感謝申し上げます。

さらに、法政大学出版局の郷間雅俊氏にもこの場を借りてお礼を申し上げます。そもそも、日本ミシェル・アンリ哲学会のワーキンググループからの相談のうちに、『ミシェル・アンリ読本』の出版を勧めてくださったのは郷間氏であった。その後も、編者たちからのお願い、質問、要望等に丁寧に対応していただき、執筆者、編者ともども安心して出版作業に取り組むことができた。郷間氏の勧めと理解がなかったなら、本読本が読者の手に届くことはなかっただろう。最後になるが、本書を手にとっていただいた読者のみなさんにとって、この『ミシェル・アンリ読本』が、新しく／あらためて「ミシェル・アンリ」を発見する機会になることを心から願っている。

二〇二二年七月三日

編者を代表して

川瀬雅也

## 註

(1) プルースト「見知らぬ男」『楽しみと日々』岩崎力訳、岩波文庫、二〇一五年、二二七―二四〇頁。なお、この短編は、他の小品とともに、「悔恨、時々色を交える夢想」という総タイトルのもとにまとめられている。

(2) Xavier Tillet, \*Une nouvelle monadologie: la philosophie de Michel Henry\*, in *Gregorianum*, Vol. 61, No. 4, 1980, p. 633.